

えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきもののほうが多くあるということ、ただそうであるだけいうために。」

コロナ禍が落ち着いた後、このウイルスによってもたらされた混乱と悲劇を糧に、世界のあちこちで優れた文学が生まれるかもしれない。そして幾人ものリウーが活躍するだろう。しかし、有能で意志の強いリウーやタルーのよう

『ペスト』という実験の果て

池上貴子

世界がコロナ禍の危機的状況に長く置かれている現在、読書会でカミュの『ペスト』を扱えたのは幸運だった。今や誰もが『ペスト』の登場人物なのだ、読んで戦慄し興奮しない訳はない。

誰もが『ペスト』の登場人物とは誇張ではない。作品では実に多彩な人物が、独自の役割をもち作品世界を作り上げていく。医療の最前線に立つ医師リウー、教義中心的な

な人はまれである。だとすれば、私たちは今このコロナ禍の中でグランのように「躊躇なく『うん』』といえる人間でありたいと切に願うのである。

注

(1) Sustainable Japan 世界のサステナビリティ・ESG投資・SDGs

<https://sustainablejapan.jp/cdn.ampproject.org/v/s/sustainablejapan.jp/2020/0sustainablejapan.jp>

立場が少年の死を介して変化するパヌルー神父や、職務への慎ましい誠意を持つ市の臨時補助吏員グラン、ペスト禍というどん底の平等にこそ息をつけた犯罪者コタール、そして不運にも居合わせ隔離に巻き込まれた記者ランベールなど。

しかし作品はポリフォニー（多声的）な効果を狙った群像劇である一方、〈町〉一つを〈人間〉だけで作り上げた人工的構成をもち、実験作としての側面が感じられる。たとえば作品冒頭、ペストが発生するオランの〈町〉は、「全く近代的な町であり、」特異なことではない「人々に営まれた、」習慣というものにあつらえ向きな町」だと執拗に定義される。ここで強調される〈市民〉たちの〈習慣〉が、

ドウルーズ的な意味での〈進化を抑圧する同一的運動〉だとすれば、ペストとは強制的に変化（進化）を促す外的要因としての側面をもつことになる。このように、〈習慣〉を揺るがすウイルスというモティーフと、〈隔離〉という閉鎖的状态、そして〈習慣〉の中で生活していた〈人間〉、の三要素が、架空の〈町〉という空間の中で展開するのである。ここに冷徹ながら激しい好奇心に満ちた文学的実験が読み取れないだろうか。

したがって、『ペスト』では、各人物のドラマを通し人間性を掘り下げていく一方で、〈人間〉が極限状態において、徐々にその人間性を失っていく様子も描かれている。それが最も顕著なのは、死体の埋葬方法の変遷だ。

初めの頃われわれの葬式の特徴をなしたものは、迅速さということであった。すべての形式は簡略化され、そして一般的なかたちでは葬儀の礼式というものは廃止されていた。

迅速な埋葬の方法では、蓋を打ち付けられた棺を家族と別の車に乗せ、全速力で墓地に運び、家族がゴム印を押せば、待ち構えた司祭が祈禱のうちに棺をおろし（式はしない）、灌水器を振るや早くも土がかけられていく。その間

十五分。「最大限の速度と最小限の危険性」という「実用性」というもののためにすべてを犠牲にしていた」ため、「少なくとも初めのころは、家族の人々の自然の感情はそれによって傷つけられた」という。これが、食糧や物資補給が微妙な段階になると、身内や自分の〈死に方〉を考えている余裕さえなくなっていく。棺と屍衣は使い回され、墓穴が共同という段階になった時、もはや身内も立ち入り禁止の死体処理〈作業〉に変化したのである。

墓地のはずれの、乳香樹におおわれた裸地に、巨大な墓穴が二つ掘られていた。男子用の墓穴と女子用のそれとがきまっていた。（中略）そしてずっと後になって初めて、事態の圧力により、この最後の羞恥心も消失し、男たちと女たちとを、礼儀上の慎みも何も構わず、互いにごちゃまぜに積み重ねてうずめるようになったのであった。

生前の人間関係を惜しみ、神のもとへ送り出すという宗教的・社会的な〈儀式〉が、〈実用性〉の浸食により無効化され、人間を石灰と土に同化させる〈作業〉へと変質していく。愛する者を失った〈市民たち〉もまた、最初期は「記憶はあったが、想像が不十分」になり、ついで「彼らは記憶も失ってしま」う。顔（外的形質）を忘れたのでは